

第76回ジェンダーセッション

開催レポート

フィリピン南部における紛争と女性

——「移行期正義と和解」の取り組みは過去にどう応えるのか

登壇者：ルファ・ギアム氏

Alternate Forum for Research in Mindanao (AFRIM) 理事
元ミンダナオ国立大学ジェネラルサントス校教授

石井 正子

Key Words フィリピン、武力紛争、女性

はじめに

2018年10月19日に、フィリピン南部ミンダナオ島からルファ・ギアム教授を招いて、同地域で展開されてきた武力紛争と女性について考えるセッションを開催した。

フィリピン南部では、1970年前後にムスリム（イスラム教徒）を中心とした解放戦線が結成され、自決権を求める武力紛争が展開されてきた。このことを一つの契機として、1972年に当時のマルコス大統領は戒厳令を布告し、軍事力によって分離運動を抑制しようとした。そのため南部では、1970年代から80年代にかけて政府軍と解放戦線とのあいだで激しい戦闘が戦われた。政府軍は一般住民のなかに解放戦線の兵士が紛れ込んでいたり、支持者がいるとみていた。そのため、ムスリムの居住地域が攻撃の対象となり、多くの一般住民が暴力の対象となった。犠牲者の数は正確には数えられていないが12万人にもものぼるといわれ、そのなかには、多くの女性も含まれていた。

フィリピン南部の武力紛争は、日本と経済的、

社会的関係が強く、地理的にも近い隣国で発生している。およそ50年にもわたって解決されておらず、世界でもっとも長く戦われている紛争の一つである。しかし、それにもかかわらず、メディアで取り上げられることはほとんどなく、日本人にはあまり知られていない。そこでこのセッションでは、まずはフィリピン南部の紛争と女性の経験を理解する一つの手がかりとして、フィリピン人権委員会が2015年に制作した一つの虐殺事件を取り上げたドキュメンタリー映像を上映することとした。



セッション会場の様子（サキナ・ギアム氏撮影）



地図 フィリピン南部ミンダナオ島とパリンバン町

1. パリンバン虐殺

上映作品のタイトルは「マリスボンの語り (Mga Kwento Sa Malisbong)」であり、YouTubeで公開されている (<https://www.youtube.com/watch?v=joREJWwtw4>)。パリンバンというのは、ミンダナオ島スラタンクダラト州にある町の名前である (地図)。そのパリンバン町のマリスボン村にタクビル・モスクがあり、虐殺はそこで起こった。マリスボン村にあるため、この虐殺事件は地元では「マリスボン虐殺」として知られ、語り継がれている。事件の概要は映像作品や後述の移行期正義と和解のための委員会の報告書によると次の通りである。

1974年9月22日は、ラマダン (断食月) 3日目であった。その日、10～11隻の海軍の軍艦がやってきて、マリスボン村、クラン村、ルミタン村、ブトゥルル村、バリヤノ村を砲撃した。砲撃

がはじまると、9村から多くの人が山のほうへ逃げた。砲撃がやんだため、人びとが山から降りてくると、その多くがタクビル・モスクに集められた。その後、女性と女兒はモスクから解放されたが、モスクに残された男性と男児あわせて約1500名ほどが銃殺された。女性と女兒は、沿岸



タクビル・モスク (2008年2月、筆者撮影)

に停泊していた海軍の軍艦に乗せられ、数日後に解放された。その間、正確な人数は分からないが女性が政府軍の兵士によってレイプされた。300棟の家が燃やされたことも確認された。

2. 紛争の構造的暴力と女性

実は私は、1995年から1996年までパリンバン町から約100キロメートル離れたジェネラルサントス市を拠点に、1970年代から80年代の戒厳令の時代に激化した武力紛争が一般の女性に与えた影響を理解しようと、紛争を経験した女性たちの語りに耳を傾けたことがあった。紛争が激化した時代、ジェネラルサントス市は、ミンダナオ島各地から身一つで逃れてきた避難民が集まる拠点となった。聞き書きを行っている際中、とくに女性たちが恐怖に顔をひきつらせて話していたのが「マリスボン虐殺」であった。

映像作品は、この虐殺を経験した住民の証言によって構成されている。映像のなかの男性の証言は、数少ない生き残りによるものである。モスクに集められた住民のうち、5日後には女性たちが解放された。しかし、彼女たちの夫や息子などはモスクに取り残されたため、村から離れて避難するわけにもいかなかった。また、夫が拘束されているあいだは、母親たちが子どもを食べさせていかなければならなかった。そして、そのような環境のなかで、性的暴力にあう女がいたのである。

私は13か月間のミンダナオ島滞在で84名の女性にインタビューをしたのだが、そのなかで、自身が性的暴力の被害にあったとほめかしたのは、一人であった。それは、フィリピンのムスリム社会に限ったことではないが、同社会でも、性的暴力にあったことは恥であるという見方が強いいため、本人は公言することはおろか、周りもそれにことさら触れないことが、暗黙の了解になっているからである。

しかし、この映像のなかには、自らが性的暴力

にあったと証言する女性が登場する。そのうちの一人の証言は次の通りである。

兵士に会ったので、
「お願いします、お米をください。2日間も食べていないのです」
といました。
「軍艦に来てください」というので、
行くと、コメと缶詰の魚をくれました。
そこで私は
「モスクにいる父親に会いたいので一緒に来てくれませんか」
と頼みました。
「いいよ」といったので、私たちはジープに乗りました。

モスクから戻ると、夜の7時になっていました。

彼は「それで？」
と私に聞きました。
彼は状況を利用して、私に強要しました。
私は何もできませんでした。
受け入れるしかありませんでした。
食べ物を得て、他の人を助けるためです。
私は彼の“トモダチ”になりました。
彼は私のことが好きだったので。

本当は嫌だったので。
でも他の人のために
お米を手に入れる必要がありました。
ただ耐えていました。

ここに描かれている性暴力は、武力紛争下で敵兵によって物理的暴力を振るわれることによって抵抗力を奪われ、強制的にレイプされることとは異なるものである。生きる手段としての食糧を確保する経路を断たれ、父親への面会を絶たれるという状況下におかれることにより、彼女は抵抗することができなかった。性交渉を迫られたとき抵抗したならば、物理的な暴力を振るわれるかもし

れない、という恐怖もいかほどであっただろうか。一時的に振るわれる性暴力とは異なり、彼女は複数回にわたって迫られることを受け入れざるをえなかった。

彼女の証言は、紛争下で振るわれる性暴力を強要する強制力を、物理的な暴力という範囲で捉えるのではなく、武力紛争という環境の構造的な暴力として捉えることの重要性を示唆している。すなわち背後に物理的な暴力があり、生きる手段を奪われた状況下におかれることが性交渉への合意を余儀なくするのである。

このように武力紛争下の暴力を構造的に捉えなければ、女性たちが振るわれた暴力に対する正義を回復することは難しい。「女性と子どもはモスクで殺されることはなかったが、国軍の暴力は彼らの正気と尊厳を奪った」と映像は述べている。この点に関して、会場からは慰安婦が振るわれた暴力をとらえることの難しさと似ているとの重要な指摘があった。

3. 移行期正義と和解のための委員会

さて今日、フィリピン南部には主に二つのムスリム系の解放戦線が展開している。モロ民族解放戦線 (Moro National Liberation Front: MNLF) とモロイスラム解放戦線 (Moro Islamic Liberation Front: MILF) である。いずれの解放戦線も政府と和平交渉のテーブルについている。このうち、最大の武装勢力である MILF は、1997年から和平交渉を開始したが、前アキノ III 世政権下 (2010年6月30日～2016年6月30日) でそのプロセスが大きく進展し、それを引き継いだドゥテルテ政権 (2016年6月30日～) において最終和平合意の締結に向かっている。

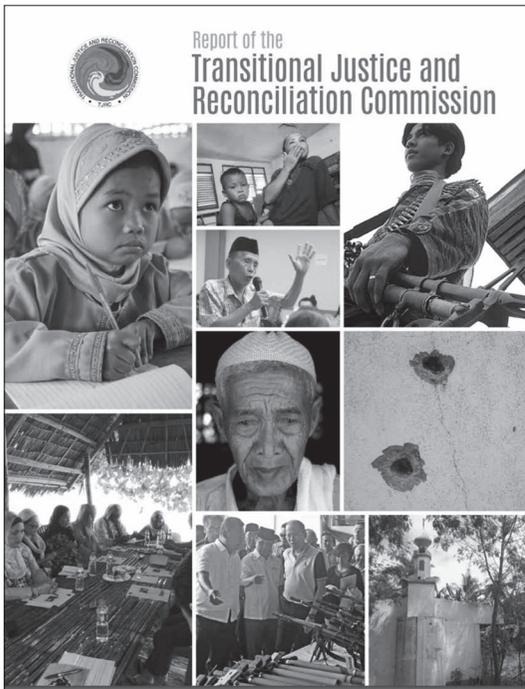
前アキノ III 世政権は、MILF との和平合意を達成するという政治意志をもっており、2012年に両者は最終和平にむけたロードマップを記した枠組合意 (Framework Agreement on the

Bangsamoro: FAB) に署名した。枠組合意は主に4つの文書から構成されているが、うち「正常化 (Normalization)」の文書において「移行期正義」の重要性が謳われた。そして、その実現のために2014年9月27日に「移行期正義と和解のための委員会 (Transitional Justice and Reconciliation Commission: TJRC)」が設立された。

移行期正義とは、紛争や抑圧的な政治体制を経験した社会が、真実究明、正義、償い、和解などを通じて過去の人権侵害を清算する司法、非司法の手段である。フィリピン南部の場合は、最終和平合意締結を目論み、紛争終結後の社会を迎えることに備えて同委員会が設置された。それゆえに、委員会の目的も南部の紛争で被害にあったそれぞれ異なる背景をもつコミュニティが癒され、和解に導かれることを視野に入れて調査と提言を行うこととされた。委員会の7名の構成員は、政府と MILF の和平交渉団が任命した。議長はスイス外務省の特使であるが、ほか6名は2名が政府、2名が MILF、1名がスイス外務省の専門家、1名がジェンダー専門家、という構成である。調査にあたって同委員会は、以下4つの焦点を設定し、それぞれへの対応策を検討することとなった。

- ・バンサモロの人びとの正統な悲しみと憤懣に取り組むこと
- ・歴史的不正義を正すこと
- ・人権侵害に取り組むこと
- ・土地の収奪による周辺化の問題に取り組むこと

そして2015年より、この4つの焦点のもと、210以上の異なるコミュニティ (モロ、非モロ先住民、キリスト教徒の移民とその子孫、*モロとはムスリムを中心とする南部の先住民のこと) において約3000人から聞き取りを行った。聞き取りにあたっては、上記のメンバーのほか、自治体、NGO や地域の専門家が協力することとなった。セッションの講師であるルファ・ギアム氏はコミュニティでの聞き取りのコーディネーターをつとめ、実際にコミュニティを訪れ、多くの女性から直接話を聞いた。それらの証言は2016年に



Report of the Transitional Justice and Reconciliation Commission. Transitional Justice and Reconciliation Commission, 2016.

https://www.menschenrechte-philippinen.de/tl_files/aktionsbuendnis/dokumente/weiterfuehrende%20Dokumentensammlung/Transitional_Justice_and_Reconciliation_Commission_-_Report_2016.pdf

発表された報告書に記されている。

実際、女性への暴力はすべてのコミュニティの聞き取りにおいて語られた、とギアム氏は自身の経験を振り返った。そのなかには、政府軍兵士が妊婦の腹を引き裂いて胎児を絞め殺したり、性的関係を強制的に迫るなどの激しい暴力の経験が語られることもあったという。語られたレイプを含む女性に対する暴力のケースは96件であった。

こうした直接的な暴力の経験もさることながら、報告書やギアム氏の発表から読み取れることは、武力紛争前の社会に存在していたジェンダーの差異が、武力紛争下において女性に否定的な影響をもたらしたり、新たな役割を課すことになったということである。例えば、紛争下において男性のほうが身を隠さなければならない状況が生ま



ルファ・ギアム氏のパワーポイントのスライド

れたために女性が生産労働に従事しなくてはならなかったり、女性のほうが男性よりも教育水準が低いために夫を失った後に生計維持に苦労した、などである。一方で、こうした紛争下の新たな経験はまた、既存のジェンダー関係に変化をもたらす契機にもなった。例えば、紛争前までは女兒の教育の重要性は外から押し付けられる価値観であったため消極的に応じる程度であったが、紛争を契機に、ムスリムの社会自体が視座の転換を迫られ、女兒の教育に熱心になっていくことが見られたのである。

ルファ・ギアム氏は、移行期正義と和解のための委員会の聞き書きを進める過程で、武力紛争によって女性が被った被害から、女性が果たした役割まで、女性の語りが聞かれることが少ないことが大きな課題として浮かび上がったと述べた。紛争後の未来を決める和平プロセスにおいて、女性の語りを反映させることは重要であるが、そもそもその契機が欠如している傾向がある。会場からは、彼女たちが経験した暴力の語りを聞くことに苦労はなかったか、という質問もあったが、ギアム氏は、多くの女性たちが自分たちの語りに耳が傾けられたことを歓迎した、と答えた。

本セッションを通じて、あらためて紛争下の女

性への暴力を理解するにあたっては、物理的な暴力だけではなく、構造的な暴力がジェンダーの差異を含めて重層的に女性に影響をあたえることが

わかった。そうした暴力の多義性を理解することが、彼女たちの尊厳回復に重要である。

ルファ・ギアム教授

Alternate Forum for Research in Mindanao (AFRIM) 理事。元ミンダナオ国立大学ジェネラルサントス校教授。AFRIMは、国際支援の実践などを一般住民の視点から批判的に考察する調査機関である。国連機関、各国政府、国際 NGO などによるフィリピン南部の平和構築支援の評価に数多く携わる経験をもつ。主な著書に “A Deadly Cocktail? Illicit Drugs, Politics and Violent Conflict in Lanao del Sur and Maguindanao,” co-written with Steven Schoofs, in *Out of the Shadows: Violent Conflict and the Real Economy in Mindanao* (Quezon City: International Alert, 2013); *Gender and Livelihoods for Internally Displaced Persons in Mindanao* (Washington, DC: The Brookings Institution and the London School of Economics Internal Displacement Project, July 2013) などがある。